



つなごう日本遺産

両毛3市の魅力発信



報告書

令和3年(2021)2月
館林市「日本遺産」推進協議会



文部科学省 令和2年度文化芸術振興費補助金(地域文化財総合活用推進事業)

令和2年度 館林市日本遺産シンポジウム



つなごう日本遺産

両毛3市の魅力発信

報告書

令和3年(2021)2月
館林市「日本遺産」推進協議会



あいさつ

みなさん、こんにちは。令和2年度 館林市日本遺産シンポジウムを開催するにあたり、ご挨拶を申し上げます。

令和元年5月に館林市が「里沼」のストーリーで日本遺産の認定を受けてから2年目となり、現在、さまざまな事業に取り組んでいるところです。ちょうど1年前には、日本遺産「里沼」をまちづくりにどう活かすかをテーマにした「里沼」シンポジウムを開催いたしました。

今回は認定から2年目ということで、日本遺産の大先輩である桐生市、足利市の市長様やご担当の皆様にお越しいただき、「つなごう日本遺産～両毛3市の魅力発信～」をテーマにしたシンポジウムを開催いたします。

日本遺産は、現在日本国内に104件が認定されておりますが、北関東の東武伊勢崎線沿線である両毛地域には、館林市を含めて3つの日本遺産が認定されています。

本日のシンポジウムでは、桐生市・足利市・館林市の3市が連携して、今後の日本遺産の魅力発信につなげるための意見交換を行います。

また、第2部では、館林市の「里沼」をテーマとしたオリジナルバレエ「里沼物語」を、館林市を代表するバレエダンサー清瀧千晴様をはじめとし、市内のバレエ教室の皆様によってご披露いただきます。「祈り」「実り」「守り」をテーマにしたすばらしいバレエをご覧くださいことで、心やすらぐひと時をお過ごしいただければと思います。

昨年以降、新型コロナウイルス感染拡大によって、日本遺産の取り組みにも少なからず影響が出ておりますが、コロナ禍であるからこそ、日本遺産を通して身近な地域の歴史文化に目を向ける絶好の機会となり、未来へ向けて新しい地域の魅力発信について、会場のみなさまと一緒に考えていきたいと思っております。

本日はご多用の中、このシンポジウムに足をお運びいただきましたことに厚く御礼を申し上げ、開会の挨拶とさせていただきます。

最後までどうぞよろしく願いいたします。

令和3年2月21日

館林市「日本遺産」推進協議会 会長

館林市長 須藤 和臣

例 言

- 1 本書は、令和3年(2021)2月21日(日)午後1時30分から午後4時に、館林市文化会館カルピス®ホールにおいて開催した令和2年度館林市日本遺産シンポジウム「つなごう日本遺産～両毛3市の魅力発信～」の実施結果報告書である。
- 2 第1部「両毛3市の日本遺産認定ストーリー紹介」は、各市制作による日本遺産ストーリー紹介映像を上映した。また、第2部「オリジナルバレエ『里沼物語』」では、館林市出身バレエダンサーの清瀧千晴さんの総合演出のもと、地元で活動するバレエ団体が日本遺産「里沼」をテーマに演舞を行った。さらには、第3部「パネルディスカッション『両毛3市の歴史文化を軸としたローカル・ディスタンス連携』」は、コーディネーターを熊倉浩靖氏(館林市「日本遺産」推進協議会委員／高崎商科大学特任教授)、パネリストは荒木恵司氏(桐生市長)、和泉聡氏(足利市長)、須藤和臣氏(館林市長／館林市「日本遺産」推進協議会会長)の各者が務めた。
- 3 本書の編集は、館林市「日本遺産」推進協議会事務局歴史文化部会(館林市教育委員会文化振興課日本遺産プロジェクト)の岡屋紀子・吉村昭和・岩瀬宇が担当し、シンポジウムの文字起こしは館林市教育委員会文化振興課市史編さんセンターの井坂優斗・島村敏江が担当した。

目 次

あいさつ

例 言

目 次

実施結果	4
第1部 両毛3市の日本遺産認定ストーリー紹介(映像上映)	5
第2部 オリジナルバレエ「里沼物語」	9
第3部 パネルディスカッション「両毛3市の歴史文化を軸としたローカル・ディスタンス連携」	12
当日の様子(記録写真)	21
アンケート結果	22

令和2年度 館林市日本遺産シンポジウム 「つなごう日本遺産～両毛3市の魅力発信～」 実施結果

- 1 事業名：文化庁文化芸術振興費補助金（地域文化財総合活用推進事業）
館林市「日本遺産」シンポジウム開催事業
- 2 シンポジウム名：令和2年度 館林市日本遺産シンポジウム
- 3 開催期日：令和3年(2021)2月21日(日)
開始 午後1時30分(開場午後1時)
終了 午後4時00分
- 4 会場：館林市文化会館カルピス®ホール(群馬県館林市城町3番1号)
- 5 参加者数：400名
- 6 主催：館林市「日本遺産」推進協議会
共催：桐生市・かかあ天下ぐんまの絹物語協議会
足利市・足利市教育委員会・教育遺産世界遺産登録推進協議会
館林市・館林市教育委員会
- 7 内容：
 - ❖第1部 両毛3市の日本遺産認定ストーリー紹介(映像上映)
 - ①「かかあ天下一ぐんまの絹物語」
 - ②「近世日本の教育遺産群—学ぶ心・礼節の本源—」
 - ③「里沼(SATO-NUMA)—『祈り』『実り』『守り』の沼が磨き上げた館林の沼辺文化—」
 - ❖第2部 オリジナルバレエ「里沼物語」
 - 総合演出 清瀧 千晴 氏(館林市出身バレエダンサー)
 - 出演 「祈りの沼」 館林バレエ・ジャズダンス教室
「実りの沼」 館林バレエアカデミー
「守りの沼」 館林N・S・B・S
 - ❖第3部 パネルディスカッション
「両毛3市の歴史文化を軸としたローカル・ディスタンス連携」
 - コーディネーター 熊倉 浩靖 氏(館林市「日本遺産」推進協議会委員/高崎商科大学特任教授)
 - パネリスト 荒木 恵司 氏(桐生市長)
 - 同 和泉 聡 氏(足利市長)
 - 同 須藤 和臣 氏(館林市長/館林市「日本遺産」推進協議会会長)
 - ❖その他
 - (1) 日本遺産マルシェ 両毛3市観光協会ほか
 - (2) 日本遺産PRブース展示 桐生市観光交流課(日本遺産活用室)
足利市教育委員会文化課
館林市日本遺産プロジェクト(文化振興課)

❖第1部 両毛3市の日本遺産認定ストーリー紹介(映像上映)

①「かかあ天下—ぐんまの絹物語—」

桐生市観光交流課(日本遺産活用室)

②「近世日本の教育遺産群—学ぶ心・礼節の本源—」

足利市教育委員会文化課

③「里沼(SATO-NUMA)—『祈り』『実り』『守り』の沼が磨き上げた館林の沼辺文化—」

館林市日本遺産プロジェクト

《司会進行 戸叶俊文(館林市教育委員会文化振興課長)》

戸叶(司会) みなさんこんにちは。定刻となりましたので、これより「令和2年度館林市日本遺産シンポジウム つなごう日本遺産 両毛3市の魅力発信」を開会いたします。

はじめに主催者を代表いたしまして、館林市「日本遺産」推進協議会会長、館林市長須藤和臣よりご挨拶申し上げます。



須藤館林市長 皆様こんにちは。本日は大勢の皆様にて、この館林市文化会館カルピス®ホールにお越しいただきましたこと、心から感謝と歓迎を申し上げたいと存じます。

—昨年5月、令和の始まりと共に「里沼(SATO-NUMA)—祈り・実り・守りの沼が磨き上げた館林の沼辺文化—」というストーリーが日本遺産に認定していただくことができました。ちょうど1年前の2月、第1回の日本遺産シンポジウムを館林市で開催いたしまして、テーマはこの日本遺産「里沼」をどういうふうにまちづくりに活かしていくかということでした。その結果、会場の皆様に今後この里沼をまちづくりのシンボル、ひとつの北極星として、市民協働・共存のまちづくりを行っていかう、すなわち「ヌマベーション連絡協議会」を立ち上げていかうということで賛同を得ました。

昨年秋に、市内の沼辺の環境保全、あるいは観光・地域活性化などに関わっていらっしゃる60団体様にご協力やご理解をいただきまして、その「ヌマベーション連絡協議会」が発足いたしました。今まで本市においては市民協働のまちづくりということを進めて参りましたが、いよいよ皆さんが共通のシンボリックなものを持って取り組むことができるまちづくりがスタートを切ったところでございます。

この第2回目のシンポジウムである本日のテーマは「つなごう日本遺産～両毛3市の魅力発信～」でございます。この日本遺産につきましては2015年、桐生市において「かかあ天下—ぐんまの絹物語—」が認定されました。また同年栃木県の足利市におきましても「近世日本の教育遺産群—学ぶ心・礼節の本源—」というストーリーで日本遺産に認定されております。今日は両市の市長である桐生市の荒木市長・足利市の和泉市長にもお越しいただいております。それぞれの日

本遺産のテーマを再認識するとともに、この両毛3市において今後マイクロツーリズムと言われる、新型コロナ禍において遠くに旅行に行くよりも近い場所で楽しむということを目指したいと思っております。お互いに交流が進むように、今日はディスカッションして参ります。さらに、アフターコロナにこの3市が日本遺産の中でどう連携をとっていくのかといったことも、3市・3人の市長でディスカッションして参ります。皆様のご理解とご協力をお願い申し上げます。

そして、今日は皆様にプレゼントがございます。それは、2部におきまして館林出身バレエダンサーの清瀧千晴さんによって、オリジナルバレエ「里沼物語」を披露させていただきたいと思っております。そこにおきましては、市内の館林バレエ・ジャズダンス教室、また館林バレエアカデミー、館林N・S・B・Sの、それぞれのバレエ教室の皆さんに「祈りの沼」「実りの沼」「守りの沼」を演出していただきます。今館林には多々良沼・城沼に100羽以上の白鳥が来ております。バレエにおいては「白鳥の湖」がもちろん有名でございますけれども、今日はその白鳥に劣らず、さらに勝るバレエダンサー、バレリーナたちの演出を是非皆さんにご覧いただければと思います。どうぞ最後までゆっくりとご観覧いただきますよう、主催者を代表しての挨拶と代えさせていただきます。



戸叶(司会) ありがとうございます。続きまして、本日の日程についてご説明いたします。お手元のプログラムのとおり、これから両毛3市の日本遺産認定ストーリーを映像により紹介いたします。休憩をはさんで、第2部として、オリジナルバレエ「里沼物語」を上演いたします。続きまして、第3部として「両毛3市の歴史文化を軸としたローカル・ディスタンス連携」と題してパネルディスカッションを行い、3市連携を推進するための共同宣言を行います。終了は、おおむね午後4時過ぎを予定しております。また、ホワイエ(館林市文化会館カルピス®ホール内)では、3市の日本遺産関連商品の販売も行っておりますので、休憩時間等にご利用ください。

《両毛3市日本遺産認定ストーリー映像上映》

※映像のため次ページ以降(P6-8)にて紙面紹介

【1】 両毛3市の日本遺産認定ストーリー紹介



桐生市

#02

かかあ天下 —ぐんまの絹物語—



白瀧神社



旧模範工場桐生燃糸合資会社事務所棟



桐生市桐生新町伝統的建造物群保存地区

■認定年月日 平成27年(2015)4月24日

■認定形式 シリアル型 群馬県(桐生市の他に甘楽町、中之条町、片品村)

■ストーリー概要

古くから絹産業の盛んな上州では、女性が養蚕・製糸・織物で家計を支え、近代になると、製糸工女や織手としてますます女性が活躍した。夫(男)たちは、おれの「かかあは天下」と呼び、これが「かかあ天下」として上州名物になると共に、現代では内に外に活躍する女性像の代名詞ともなっている。「かかあ」たちの夢や情熱が詰まった養蚕の家々や織物の工場を訪ねることで、日本経済を、まさに天下を支えた日本の女性たちの姿が見えてくる。

■主な構成文化財

白瀧神社(ぐんま絹遺産)、旧模範工場桐生燃糸合資会社事務所棟(市重文/ぐんま絹遺産)、桐生市桐生新町伝統的建造物群保存地区(国重伝建/ぐんま絹遺産)、後藤織物(国登録/ぐんま絹遺産)、織物参考館“紫”(国登録/ぐんま絹遺産)、桐生織物会館旧館(国登録/ぐんま絹遺産)

群馬県桐生市

古くから織物のまちとして発展してきた桐生市は、大正10年(1921)に全国84番目の市として誕生し、幾多の市域の変遷をへて、平成17年(2005)6月13日には新里村、黒保根村と合併しました。

桐生市は、群馬県の東南部に位置し、栃木県の足利市と接し、西は赤城山まで達しています。市街地には渡良瀬川と桐生川が流れ、山々が屏風状に連なり、水と緑に恵まれた地に歴史と伝統が息づいています。

桐生の織物の起こりは古く、奈良時代のはじめには絹織物を朝廷に献上し、江戸時代には「西の西陣、東の桐生」とうたわれ、織物の一大産地となりました。

織物産業の繁栄を今に伝える町並みがいたるところに残り、近代化遺産の宝庫となっています。特に、天満宮地区と本町一、二丁目には、約400年前の土地の区画(敷地割)に江戸後期から昭和初期に建てられた主屋や土蔵、ノコギリ屋根の工場など、絹織物業に係わるさまざまな建造物が数多く残り、織物業で栄えた桐生の歴史を今に伝えることから、国の「重要伝統的建造物群保存地区」に選定されています。

桐生は今でも織物の糸へんで生きるまちですが、近年は自動車関連部品の製造など機械金属産業が基幹産業となっており、“感性”を育む人づくり、“つながり”を生かしたまちづくりをテーマに、「感性育み 未来織りなす 粋なまち桐生」を将来都市像として、住みよいまちづくりに努めています。

●人口：108,330人 *令和2年(2020)12月末

●面積：274.45 km²

●市制施行：大正10年(1921)3月1日 【令和3年(2021)で100周年】





足利市

#01

近世日本の教育遺産群

—学ぶ心・礼節の本源—



足利学校跡



漢籍『礼記正義』『尚書正義』『文選』『周易注疏』



釋奠

■認定年月日 平成27年(2015)4月24日

■認定形式 シリアル型 足利市の他に水戸市(茨城県)・備前市(岡山県)・日田市(大分県)

■ストーリー概要



我が国では、近代教育制度の導入前から、支配者層である武士のみならず、多くの庶民も読み書き・算術ができ、礼儀正しさを身に付けるなど、高い教育水準を示した。これは、藩校や郷学、私塾など、様々な階層を対象とした学校の普及による影響が大きく、明治維新以降のいち早い近代化の原動力となり、現代においても、学問・教育に力を入れ、礼節を重んじる日本人の国民性として受け継がれている。

■主な構成文化財

足利学校跡〔聖廟および附属建物を含む〕(国史跡)、漢籍『礼記正義』『尚書正義』『文選』『周易注疏』(国宝(書跡))、釋奠(市民俗文化財)

栃木県足利市

足利市は、足尾山地から連なる山々と関東平野が接するところに位置し、中央を西から東へ渡良瀬川が流れています。中心部には、市のシンボルとも言える足利学校や、足利尊氏の六代前の先祖にあたる足利義兼(よしかね)が居館とした史跡足利氏宅跡[鏝阿寺(ばんなじ)]があるほか、源氏や足利氏にゆかりのある寺社等が数多く残っています。

江戸時代以降は織物産業で栄え、近年はプラスチック製品や自動車部品、輸送機械器具の製造が盛んになりました。「映像のまちあしかが」の推進にも力を入れ、CG(コンピュータグラフィックス)等の映像産業も根付き始めています。

日本遺産「足利学校」を中心とした歴史資産や近代以降の古民家も活用しながら「歩いて楽しいまち」を目指す取り組みも始めており、「足利らしさ」を視점에まちづくりを進めています。

●人口：143,092人 *令和3年(2021)1月1日現在

●面積：177.76km²

●市制施行：大正10年(1921)1月1日 【令和3年(2021)で100周年】





館林市

#70

里沼 (SATO-NUMA)

— 『祈り』『実り』『守り』の沼が
磨き上げた館林の沼辺文化—



祈りの沼 茂林寺沼及び低地湿原



実りの沼 多々良沼



守りの沼 城沼

■認定年月日 令和元年(2019)5月20日

■認定形式 地域型(館林市単独)

■ストーリー概要

関東の山々が一望できる館林では、今も多くの沼と出会うことができる。館林の沼は人里近くにあり、「里山」と同様に人々の暮らしと深く結び付き、人が沼辺を活かすことで良好な環境が保たれ、文化が育まれてきた「里沼(SATO- NUMA)」であった。館林の里沼は、沼ごとに特性が異なる。その歴史を紐解くと、里沼の原風景と信仰が共存する茂林寺沼は「祈りの沼」、沼の恵みが暮らしを支えた多々良沼は「実りの沼」、館林城とつつじの名勝地を守ってきた城沼は「守りの沼」と言い換えることができる。館林の里沼を迎れば、それぞれの沼によって磨き上げられた館林の沼辺文化を味わい、体感することができる。

■主な構成文化財

茂林寺沼及び低地湿原(県天然記念物)、多々良沼、城沼、封内経界図誌(県重文)、躑躅ヶ岡(国名勝)、正田醤油(株)旧店舗・主屋(国登録)、分福酒造店舗(国登録)、旧館林二業見番組合事務所(国登録)、東武鉄道館林駅を含む全38個



群馬県館林市

館林市は、「鶴舞う形」といわれる群馬県の東南部、ちょうど鶴の頭の部分にあたり、関東地方のほぼ中央に位置しています。北には渡良瀬川、隣接する邑楽郡明和町を隔てた南には利根川と、南北に大きな河川が流れ、城沼、多々良沼、近藤沼や茂林寺沼といった多くの池沼が点在するなど、豊かな水資源と自然環境に恵まれ、多様な動植物の生息地となっている館林。城沼と多々良沼で越冬した白鳥たちが北の大陸を目指し始め、桜の花とこいのぼりの競演で春が幕を開けると、つつじ、花菖蒲、花ハスに彼岸花と、色鮮やかな花々が四季折々に館林を彩ります。浅草まで約70キロメートルと県内で最も東京に近く、東北自動車道や東武鉄道により約1時間でアクセスできることから、都心へ通勤するかたの通勤圏としてじゅうぶんな役割を果たし、日帰りでも楽しめる観光地としても多くのかたが訪れます。

現在、館林市では日本遺産「里沼」認定を契機に、「沼辺」の「イノベーション」＝「ヌマベーション」をキーワードに、郷土に誇りを持ち、地域の課題を共有できる、協働、共創、公民の連携によるまちづくりを進めています。

●人口：75,373人 *令和3年(2021)1月1日現在

●面積：60.97 km²

●市制施行：昭和29年(1954)4月1日



❖第2部 オリジナルバレエ「里沼物語」

総合演出 清瀧 千晴さん(館林市出身バレエダンサー)

出演 「祈りの沼」 館林バレエ・ジャズダンス教室 「実りの沼」 館林バレエアカデミー

「守りの沼」 館林N・S・B・S 《司会進行・聞き手 戸叶俊文(館林市教育委員会文化振興課長)》

～かつて人々が近づくことのなかった3つの大きな沼、「祈り」「実り」「守り」の沼。

そこへ人がやってくると精霊や水鳥たちが静かに目を覚まし、人々を豊かな世界へと導きます～

本日の舞台では、「祈りの沼」を館林バレエ・ジャズダンス教室の川島依子先生が館林市出身の日本を代表するオカリナ奏者、宗次郎さんの曲で、「実りの沼」を館林バレエアカデミーの小林はつみ先生がグラスノフの「四季」の曲で、「守りの沼」を館林N・S・B・Sの坂本直美先生が古典バレエの代名詞である「白鳥の湖」の音楽でそれぞれ演出いただきました。沼に導かれる男女に谷桃子バレエ団の蓮池ういと牧阿佐美バレエ団の清瀧千晴が出演します。

里沼文化で育つバレエリーナたちが力を合わせて表現する舞台を、どうぞお楽しみください。

総合演出 清瀧 千晴さん

CHI HARU KIYOTAKI

館林市出身バレエダンサー



3歳より館林バレエスタジオにてバレエを始め、石井はるみに師事
AMスチューデント、橘バレエ学校にて三谷恭三、牧阿佐美、小嶋直也に師事
2003年 ポリショイバレエ学校へ留学
2004年 第37回埼玉全国舞踊コンクール成人の部第1位
2007年 第64回東京新聞主催全国舞踊コンクール・バレエ第1部第1位、
文部科学大臣賞受賞
同年、牧阿佐美バレエ団に入団
2008年 文化庁新進芸術家海外研修員としてポリショイバレエ団で研修を積む。
2012年 スワン新人賞受賞
現在プリンシパルとして活躍

出演団体

祈りの沼



館林バレエ・ジャズダンス教室

川島依子バレエ・ジャズダンス教室
プロフィール

1983年12月館林市大谷町に教室開校。バレエ、ジャズダンス、美容体操等を幼児から一般まで幅広く指導を行う。1993年館林市緑町に移転。現在は公民館等で中高齢者に健康と体力向上にダンスを取り入れた活動も行う。毎年館林市文化協会主催「春のつどい」館林市洋舞踊連盟主管「バレエ・ダンスフェスティバル」に出演。他、老人ホームや施設等の納涼祭、クリスマス会等にも参加。

- ❖バレエクラス指導 川島依子
- ❖ジャズクラス指導 小澤博美

実りの沼



館林バレエアカデミー

小林はつみクラシックバレエアカデミー
プロフィール

1998年に館林市にて設立。これまでに、東京バレエ団、谷桃子バレエ団、井上バレエ団などプロダンサー、バレエ指導者を輩出している。2019年FLAPバレエコンクールにて優秀指導者賞を受賞。現在、館林市・邑楽町・桐生市でも指導を行っている。

❖主宰 小林はつみ

蓮池うい(谷桃子バレエ団)

小林はつみクラシックバレエアカデミー出身。2歳よりバレエを始める。2009年・2010年 Boston Ballet Schoolへscholarshipで短期留学。2014年第8回FLAP全国バレエコンクール シニアの部第4位。2015年谷桃子バレエ団入団。

守りの沼



館林N・S・B・S

N.S.B.S 坂本直美バレエスタジオ
プロフィール

2000年坂本直美バレエスタジオを館林市に開設。2011年よりN.S.B.Sとして館林市洋舞踊連盟加入。2年に一度の自主発表会開催の他、館林市芸術文化祭バレエダンスフェスティバルや60周年記念日露文化事業等参加。主に館林市にて舞台公演活動を行う。国内外でのバレエコンクールで優秀な成績を残す生徒や海外留学、プロダンサー、指導者を育成する。3歳～大人まで幅広い年齢とニーズに合わせたクラスを設け、バレエのレッスン指導に取り組む。バレエ雑誌「クララ」にスタジオ紹介掲載される。館林市市民講座講師を務めた他、優秀指導者賞受賞経験あり。

- ❖主宰及び講師 坂本直美
- ❖講師 鈴木礼奈

《オリジナルバレエ舞台後のインタビュー》



戸叶(司会) 第2部オリジナルバレエ「里沼物語」でした。いかがだったでしょうか。出演者の皆さんありがとうございました。ここで、本日演出を担当された皆様をご紹介します。

「祈りの沼」を演出された館林バレエ・ジャズダンス教室の川島依子さん、**「実りの沼」**を演出された館林バレエアカデミーの小林はつみさん、**「守りの沼」**を演出された館林N・S・B・Sの坂本直美さん、そして、総合演出を担当された、本市出身で牧阿佐美バレエ団プリンシパルの清瀧千晴さんです。本日はありがとうございました。早速ですがお話をお伺いしたいと思います。最初に清瀧さんにお聞きします。今回は館林の「里沼」をテーマにしたバレエでしたが、総合演出をされる際にどのようなことをお考えでしたか。また、沼に導かれる男女として谷桃子バレエ団所属の蓮池ういさんとの共演も見どころの一つだったと思います。共演したご感想をお聞かせください。お願いします。

清瀧千晴さん ご紹介いただきました牧阿佐美バレエ団の清瀧千晴です。今日はこのような状況の中、本当にありがとうございました。今回、日本遺産に「里沼」が認定されて、その三つのストーリーを持った沼をバレエで表現していただきたいというお話をいただきました。バレエはやはり自然や動物の様子や、人間の姿ももちろんですけど、そういうものを表現している作品がすごくたくさんあります。今回このような機会



をいただけて、本当に、バレエを観ていただくにはぴったりの舞台だと感じていました。今回のシンポジウムでは、「つながる」というテーマもありますが、このような状況で、なかなか先生方と子どもたちがみんなと一緒に練習できませんでした。本当に難しい状況の中でしたが、子どもたちが踊り繋いでいって、最後に一つの豊かな文化をつくっていくということを、バレエで表現できたらいいなと思って演出させていただきました。

この度、ご一緒させていただいた蓮池ういさんですが、同じ故郷ということで、何回か共演させていただいているのですけれども、今、他の団体に所属している方と一緒に踊る機会というのは本当に貴重で、また、このような素晴らしい機会と一緒に踊らせていただくのは本当に光栄で嬉しかったです。今日はありがとうございました。

戸叶(司会) 清瀧さんありがとうございました。続きまして、「祈りの沼」を担当された川島依子さんにお話をお聞きしたいと思います。「祈りの沼」の演出には地元出身のオカリナ奏者、宗次郎さんの「遠い日の記憶」という曲を使用されていましたが、曲と踊りの協演について工夫された点などがあれば教えてください。

川島依子さん はい。今回この「祈りの沼」茂林寺沼をやらせていただくことが決まった時に、宗次郎さんの曲が思い浮かびました。それで、担当の方にお聞きしたところ、館林をイメージした「遠い日の記憶」という曲があるということでした。この曲を聞いたところ、後半の部分、明るい曲調になったところを茂林寺の子供たちと、それを見守る花の精、特に館林なのでツツジの精というようにイメージして踊りを創らせていただきました。前半は清瀧さんをお願いしまして、素敵に繋いでくれました。館林の名産の館林紬をお衣装にも使わせていただきました。



戸叶(司会) ありがとうございました。続きまして「実りの沼」を担当された小林はつみさんにお話をお聞き

します。「実りの沼」の演出には赤とオレンジの鮮やかな衣装が舞台に引き立っていたのが印象的でしたが、今回の演出にあたり、意識した点はございますか。

小林はつみさん はい、やはり「実りの沼」ということで秋をイメージして、選曲のほうはグラスノフの「四季」から「秋」という曲で、多々良沼を散歩していると木の葉が綺麗に舞っている、そういうイメージで振付のほうをさせていただきました。



戸叶(司会) 小林さんありがとうございました。続きまして、「守りの沼」を担当された坂本直美さんにお話をお伺いします。「守りの沼」ということで、毎冬、館林市の沼辺に飛来する白鳥をイメージして演出され、白鳥が舞台上に優雅に羽ばたいていましたが、演出される際にどのような点にこだわりましたか。

坂本直美さん やはり白鳥の優雅な羽の表現、それを表す腕の動きであるとか、あとは軽やかで細やかな、脚のバレエでいうと「パドブレ」、細かい繊細な動き、それから列であったり円であったり、そうしたものを一緒に揃えるというところを一生懸命子どもたちとこだわってレッスンしてきました。



戸叶(司会) 坂本さんありがとうございました。今回のバレエは昨年の館林市のオリンピック聖火リレーの出発式に発表する予定でしたが、新型コロナウイルスの影響で今回の日本遺産シンポジウムが初披露となり

ました。今回のコロナ禍で、出演者の皆様の練習時間を確保することが難しく、また合同練習も思うようにできなかったというお話がありましたが、今回公演を演じてみてどのように感じられましたか。最後に清瀧さん、お願いいたします。

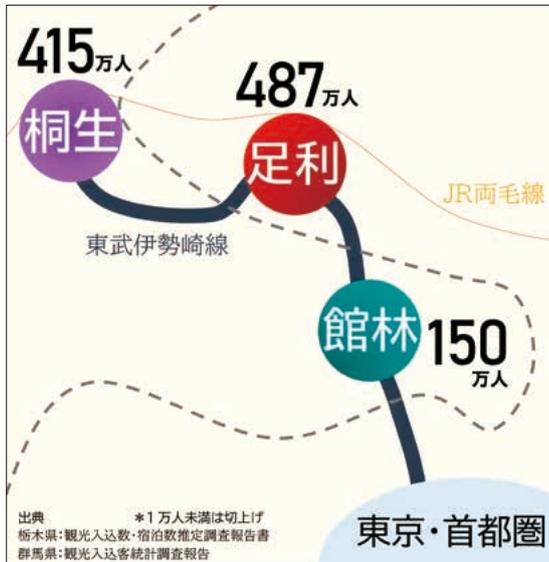
清瀧千晴さん はい。昨年オリンピックの聖火リレーのイベントということで企画していただきまして、本当にギリギリまで各団体で調整し、あとは合同練習でどうなるか形にしようという段階で中止が決まってしまう。そこから1年経ってしまって、今年に入ってこういう企画をいただいて上演が叶ったので、本当に嬉しいです。けれども、ここまで来るのには本当にたくさんの方々、市役所の方々含め、スタッフの皆さん、先生方、それから陰ながら支えてくださった保護者の皆様、全ての方々に感謝申し上げます。出られなかった子たちもいて、そういう方々の分も含め、いろいろな想いがこの舞台にはこもっていたので、今回このバレエを通して、たくさんの方にこの地元の「里沼」の文化というものをもう一度見直していただいて、後世に豊かな文化を繋げていっていただけたらありがたいと思います。本当にありがとうございました。



戸叶(司会) 出演者の皆様、演出された清瀧さん、川島さん、小林さん、坂本さんありがとうございました。皆さん拍手でお送りください。続きまして第3部パネルディスカッションです。

❖第3部 パネルディスカッション「両毛3市の歴史文化を軸としたローカル・ディスタンス連携」
 コーディネーター 熊倉 浩靖 氏 (館林市「日本遺産」推進協議会委員/高崎商科大学特任教授)
 パネリスト 荒木 恵司 氏 (桐生市長)
 同 和泉 聡 氏 (足利市長)
 同 須藤 和臣 氏 (館林市長/館林市「日本遺産」推進協議会会長)
 《司会進行 戸叶俊文(館林市教育委員会文化振興課長)》

両毛3市の観光入込客数〔2019(令和元)年度〕



- ❖北関東の東武伊勢崎線沿線である両毛地域には、日本遺産認定地が3つあります(桐生市・足利市・館林市)。しかし、館林市「日本遺産」推進協議会が2019(令和元)年度に実施したマーケティング調査の結果では、3市とも全国的な知名度はあるものの、日本遺産認定地であることはあまり知られていませんでした(認知度:桐生市7.7%、足利市15.5%、館林市10.2%)。
- ❖また、鉄道や自動車で気軽にアクセスができる一方で来訪者の滞在時間が短くなる傾向があり、地域経済への波及効果を高める魅力的な商品造成(ツアー・体験プログラム等)が喫緊の課題となっています。
- ❖このパネルディスカッションでは「両毛3市の歴史文化を軸としたローカル・ディスタンス連携」と題して、日本遺産認定地である両毛3市(桐生市・足利市・館林市)の連携による今後の事業展開を探ります。

戸叶(司会) これより第3部パネルディスカッションを開始いたします。パネリストは桐生市荒木恵司市長、足利市和泉聡市長、館林市須藤和臣市長です。コーディネーターは、館林市「日本遺産」推進協議会委員で、高崎商科大学特任教授の熊倉浩靖さんをお願いいたします。それでは熊倉さん、よろしくお願いいたします。

熊倉氏 日本遺産というものは、私たちの国が、それぞれの地域が持っている様々な文化財とか資源といったものを、点ではなくて、一つのゾーン、あるいは繋がりとして組み立てながら、そこに地域ごとのしっかりしたストーリーをつけていくという目的で、6年前から始まりました。実は、足利市の足利学校はその第1号に選ばれた「近世日本の教育遺産群」の構成文化財の一つです。そして、桐生市をはじめとする「かかあ天下一ぐんまの絹物語一」は第2号でした。そういう意味では、日本遺産を引っ張ってきた両市です。そして70番目に選ばれたのが、わが館林の「里沼」という概念でした。三つの遺産の意味については、それぞれが作られた素晴らしい動画をご覧になって、皆様なるほどと思われたかもしれません。でも、よく考えてみると、私たちは二つのことを今改めて感じたと思います。一つは、館林の市民にとっては桐生や足利は隣の町なのに、こうしたものがあって、こうした歴史や文化を育ててきて、そしてそれは私たちの行先の一つの方向でもあるということに、初めて気づいたことです。そうした方は少なくなかろうかと思います。

先ほど3人の市長さんたちから「それどこにあるの?」という話を聞きました。おそらく多くの市民の

方々がそうだと思います。もう一つは今回のテーマが「両毛3市の歴史文化を軸としたローカル・ディスタンス連携」という、文字がいくつも並んでいますが、一つ一つ意味のある言葉です。密にならない「ソーシャル・ディスタンス」という言葉を逆手にとって、近い地域はしっかりと学び合いながら繋がっていくことで、他所からも多くの人々が私たちの地域を見直してやってきてくれるだろうと考え、この地域に暮らす人々自身が誇りと同時に隣の町をきちんと見ていなかったという反省に立って、あるべき繋がりを作ろうということが、「ローカル・ディスタンス連携」だと思います。そういう意味ではお互いの町をあまりよく知らず、もしかすると自分の町のこともさえないよく知らなかったということには、とても深い意味があります。これから繋がりがあうことを通じて、自分たちの地域に対する誇りと、同時にちょっとした反省と、そしてそれを梃子として、他所からも多くの人々がこの地域に来てくれて、人も増えるし、お金も落ちるし、人々の場も作られていくという一歩を、今日踏み出せば、意味があるのだらうと思います。

その点で、皆様方は当たり前「両毛」という言葉を使いますが、両毛という言葉は群馬、栃木の一部の人々には何となくわかるけれども、日本全国の中では決してメジャーな言葉ではありません。今日は足利の方もいらっしゃるが、群馬の皆様は上毛かるたで「しのお毛の国二子塚」というものを学ぶわけですが、あの「毛の国」というのは、実態はわかりませんが、私たちの意識の中では、「かみつけの国」と呼ばれた群馬と「しもつけの国」といわれた栃木と、この二つの

地域全体を繋げる言葉を「毛の国」という言葉で表してきました。そして「かみつけの国」と「しもつけの国」が重なり合う地域、それが館林であり、桐生であり、足利です。この辺りを「両毛」と呼びました。高崎から小山または宇都宮まで行くのが「両毛線」です。高崎・前橋の「かみつけの国」の国府があった中心地域から、小山・宇都宮の「しもつけの国」の中心へと繋がるのが、二つの「毛の国」を繋ぐから「両毛線」だ、というふうに私たちは理解しています。

でも、考えると、両毛地域にはもう一つ違う名称がありました。150年も前のことです。多くの方がすっかり忘れていますが。第一次栃木県の地域が実は両毛地域なのです。今私たちは群馬県・栃木県にまたがって生きていますが、この地域は明治の最初の廃藩置県の時には、群馬県、栃木県、宇都宮県の三つに分かれていました。そして最初の栃木県が館林藩を中心とする地域です。桐生は自由都市でしたので藩がありませんでした。そして太田は呑龍様の門前町でした。ですから、桐生・みどり・太田、そしてこの館林藩を中心とする館林邑楽地域と、足利を中心とする足利・佐野辺りを中心とする地域が実は栃木県だったのです。ですから両毛地域というのは、第一次栃木県というふうに明治政府が考えるくらいの一体性を持っていました。そのことをもう一度ここで考え直しましょうというのも、今回の一つの深いテーマかもしれません。



特にそれが目についてくるのは、江戸幕府が生まれてくる頃です。桐生は白瀧姫の話から始まるわけですが、実は残念ながら、室町時代までは第一級の絹を織っていた地域ではございませんでした。桐生の絹や絹織物が俄然人々の注目を集めたのは、徳川家康公が関ヶ原の戦いに際して、3000の白旗が欲しいと言われた時に、それを織って徳川に納めることができたのが桐生だったことからです。そこから桐生は躍進していくのです。大久保長安が桐生の町に来て、ここは天領でも藩領でもないとして、一つの自由都市に位置づけられました。そして、そこからやってやるぞと、白旗を織っていった。その名前に恥じない絹織物を次々と作りだしてきたのが桐生という町です。だから「かあ天下一ぐんまの絹物語」の中核は桐生なのです。

二つ目は足利です。明治の初め、足利郡はとても強い郡であり、足利銀行が栃木県を代表する銀行である

というくらいの力を持っておりましたが、江戸時代は決して大きな藩ではございませんでした。しかし、そこには先ほど動画で紹介された、足利学校がずっとございました。いったい足利学校は誰が守っていたのでしょうか。教えていただき、わかりました。寺社奉行の直轄だったのです。つまり、足利学校は多くの有名な寺社と同じように、我が国を代表する学問の中核だから、幕府が直轄して、天領ではなくて、国民の財産にするというのが、足利学校のあり方でした。

そしてここ館林は徳川四天王の一人・榊原康政公が入られて、江戸時代260年の基を作られました。そういう意味では、第一次栃木県から遡ること260年ほど前に、日本の国が長い内戦を終えて新しい安定した国を造るときに、産業・政治・学問の三つの柱を集中した場所こそ、我々が3市でした。だから今400年経って、それぞれに趣の異なる日本遺産として、ここに認められています。そのことを今日は足掛かりとして、私たちそれぞれが、館林市民であるけれど3市の市民である、そんな気持ちになるようなシンポジウムが開けたらいいなと思っています。そして、そこを多くの人々が見てくださるような形が作れるといいなと思います。

早速3人の市長さんから、今このような試みをしているので、是非皆さん理解してください、というお話をお伺いしていきたいと思っています。桐生市の荒木市長さんからお願いします。

荒木桐生市長 皆さんこんにちは、ご紹介をいただきました桐生市長の荒木でございます。今日はこの館林の地におきまして、日本遺産のシンポジウムということで参加をさせていただきましてありがとうございます。また、私が尊敬する熊倉先生がコーディネーターということで、多少緊張しているところです。

今、先生から、桐生市の歴史についてはほとんど説明をされた通りであります。西の西陣、東の桐生というような形で、また、上毛かるたでは「桐生は日本の機どころ」と言われるように、織物の産地でありました。古くは今から1300年前、714年に「続日本紀」で、朝廷に絁（あしぎぬ）を献上したと書かれています。絁というのは「悪しき絹」、あまり質のいいものではなかったと言われているそうです。その後、徳川家康の話がありましたが、当時、上杉討伐で栃木の小山にいた徳川家康が急遽関ヶ原のほうに戻る際に、軍旗、いわゆる旗絹が無いということで桐生に寄って所望し、2410疋献上したというように聞いております。一日でこれを織り上げて、徳川家康に献上し、さらには、家康率いる東軍が関ヶ原の戦いで勝ったということで、桐生の織物は非常に縁起がいいと言われるようになりました。それから、近代以降、新しい織機を組み入れ、開発するなどして、様々な形で日本の織物を代表する一大繊維地となっていきました。

日本遺産に選定されてからの取り組みということでございますけれども、まず桐生のほうでは、日本遺産に認定された後に三つの課題があるのではないかと思います、それを解決するためにいろいろなことを行っていること、取り組みを始めました。

まず一つは、日本遺産の認知度が非常に低いということでありました。館林市のほうからいただいた資料

では、全国的に見て桐生の日本遺産の認知度が7.7パーセントとありましたが、日本遺産に認定された地域の人たちの認知度というのも同時に資料がありまして、一番高いところで33パーセント、一番低いところでは8パーセントという資料があります。これを何とかしようというのがまず一つです。

それから、二つ目が、実際に観光客を受け入れる体制ができていないのではないかとということで、そこをしっかりとしようということです。

三つ目が、観光ボランティアが非常に一生懸命頑張っていたのですが、大変高齢化しております。60歳以上のボランティアガイドの方が、桐生に限っていると、85パーセントです。これらを何とかしていくために、日本遺産認定後、取り組んでいこうという形をとらせていただきました。

まずは、認知度を高めるために、他県向けの観光パンフレットを12万部ほど作らせていただきました。それから先ほど言ったボランティアガイドについては、「織都桐生案内人の会」というものを新たに作っていただきまして、より密度が濃く、マニアックな説明ができるようなボランティアガイドを作らせていただきました。また、市内6ヶ所を巡る「日本遺産モニターツアー」というものも開催させていただきましたし、受け入れ先の人たちに日本遺産をもう少ししっかりわかってもらおうということで、「日本遺産サミット in 桐生」というものも、重要的伝統建造物群の中にある「ほこさ」という会場を使って開催させていただきました。

また、群馬県内では、世界遺産・日本遺産・ぐんま絹遺産を三本柱とうたっているわけですがけれども、富岡の世界遺産センターで日本遺産のPRをしていただくように、県にお願いをさせていただきました。今世界遺産センターのほうで日本遺産が紹介されています。また、桐生市の市役所のロビーでも、つい先日「日本遺産展」というものを開催させていただきました。さらには、昨年自分が市長に就任させていただいて、この日本遺産を桐生のまちづくりの核にしていくのだという思いの中から、「日本遺産活用室」というものを新たに作って、今進んでいるところでございます。



あと、館林の市長さん方が皆様バッジを持っていらっしゃるように、桐生の織物で日本遺産のバッジを作りました。これを2月25日から発売します。ちょっと大

きいですが、織物なので小さくできないのです。この「Japan Heritage」と書いてあるところがなかなか織れなくて苦労しました。一番下に桐生と書いてあるのですが、それぞれの日本遺産の名称に替える形で、これから営業をかけていこうかと思っております。

いずれにいたしましても、これからこの3市がタッグを組んで取り組んでいくことにより、それぞれの日本遺産がさらに輝きを増す、そのような連携になればいいかなと思っています。以上でございます。

熊倉氏 同じ質問を和泉市長さんお願いいたします。

和泉足利市長 はい、足利市長の和泉です。先ほど先生のほうから足利の両毛地区における位置づけをご紹介いただきました。足利のこの日本遺産に絡むポイントを大きく言いますと、三つあると思っています。

一つは足利学校、先ほどビデオで見ていただいた通りです。スライドも用意してきました。1668年にできた、日本で最も大きい孔子様を祀っている大成殿があります。先日、1668年の建立以来の大きな工事をしました。屋根も瓦も全部外して、東日本大震災で少し傾きかけていた部分を抜本的に修理させていただきました。これ(写真)は工事の時の様子です。

それと二つ目は、桐生と同じように、足利は繊維産業で大変栄えまして、今も7000くらいある会社のうちの4割は繊維関係のお仕事をされています。そういう意味では足利は、繊維業ということで桐生と親和性が高いです。絹織物の中で、明治の初期に足利銘仙という普段着が流行りました。それを着て街歩きを観光客に体験してもらおうという取り組みや、着付けをして、そのまま着物で街歩きをしていただくという取り組みもしています。この銘仙の特徴は、柄がぼやけているところです。これ(写真)は銘仙風のスカーフを、足利の若手の繊維業者の社長さんが開発したもので、デパート等々で扱っていただけるようになったものです。実は外務省の茂木大臣が足利出身ですが、外国から来たお客さんのプレゼントにこの銘仙のスカーフを必ず使っていただいております。

三つ目は、足利は足利尊氏に代表される室町幕府を作った足利家が出発した土地であることです。足利家が出発した邸宅跡がこの(写真)鏝阿寺というお寺で、平成25年に国宝に指定されました。足利学校、繊維業、鏝阿寺と室町幕府足利家の三つが、日本遺産の絡みで足利を語る時には大事な話になってきます。そして連携をするという文脈においては、重要な要素になってくるものだと思います。

特に、これ(写真)は桐生の荒木市長さんの前の亀山市長さんと私で、毎年銀座にありましたサロン・ド・Gという群馬県のPR施設で、我々が栃木県でありながら、群馬県の施設と一緒に使わせてもらって、桐生と足利で観光のお客さんを一緒に呼び込もうという取り組みをしました。旅行雑誌の記者さんとか旅行会社の営業担当さんとかにも来てもらいながら、この取り組みを毎年させていただきました。そういう意味では桐生と足利は繊維業と観光の取り組みでは親和性があると思います。そこに今度館林さんも繋げて展開をしていく、今日まさにそういう文脈の中での集まりなのだ

ろうと私は思っています。

日本遺産に絡むところと足利の紹介を含めて、私のほうからお話をさせていただきました。この後またお話をさせていただければと思います。

熊倉氏 ありがとうございます。それでは、須藤市長さんお願いします。

須藤館林市長 皆さま先ほどの清瀧先生をはじめ、それぞれのバレー教室のバレーいかがだったでしょうか。《会場拍手》

ありがとうございます。私も本当に感動しました。そもそも一昨年(2019年)の5月に日本遺産に認定をされましたが、もう一つ館林では、オリンピックの聖火ランナーのリレーの群馬県における出発地ということでご指名を受けたのです。それで、つつじが岡公園で出発式のセレモニーをやる際に、最初の案としては和太鼓でどうでしょうということで話が来ました。和太鼓は伝統的な日本文化で、例えば関東学園附属高校の学生さんにやってもらおうというものでした。しかし、それプラス、私たちは里沼のヌマベーションということを行っているじゃないか、城沼の畔で新しいものを試みよう、トライしようと考えました。そして、「白鳥の湖」にあやかって「白鳥の里沼」「水鳥たちの里沼」、このようなテーマで里沼を演出していただけないだろうかと思って、実は清瀧先生のお母さまのほうに連絡させていただいたのです。そうしたら、「市長さん、これは素晴らしい、バレー界に光が射したような感じがします。各教室の先生方に話してみます。」と、受けていただきました。それから練習を重ねていただいて、本当は昨年の3月末にご披露する予定だったのですが、それが叶いませんでしたので、今回初公開になりました。私たちは60から成る団体の皆さまと、ヌマベーションという合言葉で、里沼を北極星、まちづくりのシンボルとしてスタートしてきておりますけれども、今日のバレーもその一つであったかと思えます。多くの方々や団体の皆さんがそれぞれ独自に里沼のまちづくりを推進してくださっている状況であるかと思えます。

かつて館林は日本一暑い町と言われました。それは一部商いとしては標榜することもあったとは思いますが、市民の皆さんの中では、一つ一つ、一人一人が自信喪失をしていったのではなかろうかと思えます。現に人口は減少していきました。この町はどうなっていくのだろう、そんな不安にかられた人々もいたかと思えます。そうしたところで、温度計を移動してみたら、この3年間、日本一暑い町が返上できたのです。暑くならなかったのです。むしろ荒木市長さんの桐生市のほうが暑い日がありました。そのようなことで、館林は実は里沼が日本遺産に認定されて、ブランドイメージが少しずつ変わってきました。市民の皆さまにもそういった郷土愛が芽生えてきました。シビックプライドといって、いろんな課題と一緒に解決していこうという、そういう気持ちが芽生えてきました。そんなことがこの一年であったかと、振り返っております。

実際、人口減少下にはあるのですが、かつては転出者のほうが多かったのですが、こここのところ、

転入者のほうが多いように転じてきています。ですから、多くの方々がもう一度この自然と人と生業が共生するような、こうした町に住んでみたい、そんなことを少しずつ思ってきているのが、取り組みの成果ではなかったかと思えます。むしろ館林のこの交流人口もさることながら、実は審査員の方々からも、「これはむしろ定住人口増という点で日本遺産にとっては初めての地域かもしれない」ということを言われました。以上でございます。

熊倉氏 人口、交流人口、関係人口、移住・定住人口が増える方向にいく、あるいは、その減少が少しでも鈍化していけば、素晴らしい成果だと思います。今ま暮らしている皆様方がそこに対する誇りを持つと同時に、その誇りがまさにシビックプライドになって、隣の町と共有することでもっともっと高まっていくということが素晴らしいことです。先ほど既に、桐生と足利は一緒にPRしているとのことで、それを聞いて素晴らしいなと思えました。3市だったらもっと力が出てくるし、食べるものでも3市を合わせるとすごく美味しいものがいっぱいあるなと思っておりました。まさに3市の中で人が動く、外から人が3市に入ってくる、それが今回いうローカル・ディスタンスとかマイクロツーリズムということです。その辺について、このようなことを仕掛けている、成果がある、次にはこんなことを考えているという話を、足利市、館林市、桐生市の順でお話いただければと思います。和泉市長さんお願いをいたします。

和泉足利市長 はい。マイクロツーリズムということを3市で考えた場合、それぞれの町に住む人がそれぞれの町を、まず愛する・知ることが大きな出発点になるのだろうなと思えます。それによって、さらに隣の町に興味や関心が増えていくと思っています。

その意味で足利の一つ大きな取り組みの特徴としては、足利学校を中心に、いわゆる市民講座をたくさん展開しています。この市民講座が大変魅力的であるがゆえに、まったく足利に縁も所縁もなかった愛知県から、足利にわざわざ移住をしてきた方がいます。足利でのそういう市民講座の取り組みが大変楽しいので、足利に住み着くことになったといえます。そのような市民の方を先日足利市のほうで表彰させてもらったのですが、そういう動きが市民の中にあります。これは一つのマイクロツーリズムということであると、大きな足利市の特徴かなと思っています。

さらに、写真でお見せした、足利市の中心部の渡良瀬川に架かっている三連アーチの橋ですが、この橋が実は、両脇の堤防が割れ込んでいるが故に、水が溢れかねないということで、橋を架け替える構想が今進んでいます。どのように架け替えるかといえますと、橋を一回外して、下流側にスライドさせて置き直します。それで、この置き直した橋を今度は歩道に使用します。そして、車が通る橋をもう一本架けます。そういう形で架け替えるということが決まったのです。この中橋は、車ではなく人が歩くだけの三連アーチの橋になりますので、ここに屋台とかキッチンカーを並べたり、市民が集ったりできる、そういう空間にできる予定です。

そうすると非常に足利らしい顔を持った中心部のまちづくりが、川と橋と共に展開できます。そのような取り組みが進行中です。そういう取り組みが足利の新たな魅力になって、この3市を含むマイクロツーリズムの動きに繋がっていくというような展開になっていけばということで、足利市で作業・取り組みをしているところですので、ご紹介しておきたいと思います。

熊倉氏 3年ほど前に、本当に末席ですが、釋奠に参列させていただき、その後講座を受けまして、足利学校で講座を受けられるなんて本当に幸せだなと思いました。同時に、橋の先ほどのマルシェですけれども、橋マルシェと聞いて、館林は黙ってられないのではないのでしょうか。須藤市長さんいかがでしょうか。



須藤館林市長 橋マルシェの話は館林にもありますが、またの機会にします。実は、和泉市長さんとは、私が高校の後輩ですけれども、同じ足高野球部を3ヶ月で辞めたという共通項があります。私も足利に自転車で通っていましたから、くまなく市内は理解しているつもりです。それで、足利では、足利学校から育った学生さんが、日本全国に、都へ、あるいは全国に散らばって行ったのです。足利学校では儒学・兵学・占星学・医学などを皆様学んでいたわけですが、まさに足利のあの雰囲気は、都を目指すというもので、この息吹を高校生のときから感じていました。ですから、実は足利学校周辺に行って、いろんなカフェですとか、楽しめるものが、鏝阿寺も含めてあの界隈にありますので、時々お邪魔しています。そこで、私はいつも感じている、なかなか館林でできていないけれども、やりたいなと思っていることが一つあります。足利学校に行く小学生向けの「かなろんご」という、確か100円で売っている、仮名の論語の百選があります。それで、私はそれを子どもに買ってきて、例えば最初が「あやまちてあらためざる これをあやまち」というものですが、これをお風呂で子どもに「あやまち」と言うと、子どもが「あらためざる これをあやまち」と、下の句のような感じでよみます。これを小学校の学校教育に導入できないかなと思っています。足利市、和泉市長さんはやられているのですよね。

和泉足利市長 足利市では論語の素読本というものを

小・中学生に配って、日常的に学校の中で論語を唱えるということをやっております。

須藤館林市長 徳川綱吉公が日本で最初の昌平坂学問所という江戸幕府直轄の学問所を作りました。そこから文治政治が始まっていきました。ですから、館林も儒学と非常にゆかりのある土地柄です。そういうことを足利市さんの「かなろんご」をいただいて、本当はやりたいと思っています。まずは皆さん足利にお出掛けに行き、その本を手にとってみてください。

それと桐生に行くルートとして、皆様はたぶん国道50号を使われると思います。でも、ちょっと違う道を通ってみませんか。例えば、大街道のベルクのところからずっと北に行くと、赤見に行きます。それで、赤見をさらに越えて行くと飛駒に着きます。実は飛駒から桐生に行く道があります。県道66号だと思えますけど、これは昔の道です。梅田に入って行って桐生の町に入っていきます。意外と信号も無くて、本当に素敵な道です。新緑の時期は緑がいっぱい豊かです。そして、例えば夕方に桐生から帰って来ると、鹿と出会ったり、時々猿もいたり、館林ではなかなか出会えない動物たちと出会えたりするのです。館林の自然というのは非常に安全なのですが、山に入ると緊張感が実はあるのです。人間の本性たる少し野性的なところも磨かれて、マイクロツーリズムとしては素敵なルートではないかなと、そのようなこともちょっと紹介しておきたいと思います。

館林に桐生や足利の皆さんがお越しいただく際には、館林は今、沼全てにウォーキングロードを作っています。山とは違って平坦ですから、非常に楽なコースです。健康増進できます。そこで、お食事の際には、先ほどご紹介いただいた「たてばやしMinoriグルメサイト」というものを開設したのですが、うどんも今「百年小麦」というブランド化をしていますし、さらに館林でラーメンを食べることを「たてラ」と言いますが、その「たてラ」、さらには鰻、川魚の文化もごぞいます。お土産には、城下町ですから和菓子もたくさん素敵なお店があり、良い商品を昔ながらの工法で作っています。そのようなことをマイクロツーリズムとしてご紹介させていただきたいと思います。

熊倉氏 猿と鹿もさることながら、館林には狸と狐がいるので、猿と鹿は追い払われたのかもしれないですね。荒木市長さんはどうでしょうか。今のお話を聞いて。

荒木桐生市長 まず、須藤市長から桐生に入る別ルートをご紹介いただきまして、ありがとうございます。以前から須藤市長はその道を使って桐生に来ていただいていると話は聞いておりましたので、この場でご紹介をいただいて本当にありがとうございます。

その前に、今日は桐生のほうから商工会議所の石原専務理事と桐生信用金庫の津久井理事長がお見えになっていて、絶対言わなければいけないことを先ほど言い忘れましたので、述べさせていただきたいと思えます。今日皆さんがしているマスクのことです。桐生は今「メイド・イン・桐生」のマスクというものがあります。繊維メーカーの方々が独自の技術を使って、

それぞれの特徴を活かしたマスクを販売しております。商工会議所さんが中心になって、また桐生信用金庫さんは店舗をお貸しいただいて、マスクのPRを盛んにしていただいております。関東経済産業局とかジェットロを使って、国内はもとより、海外に向けてもこのメイド・イン・桐生のマスクを発信していきたいと思しますので、是非お求めいただければと思います。桐生駅の一角に物産館「わたらせ」というお土産コーナーがあるのですが、2坪くらいのマスクコーナーがあって、売れるときには一日30万円も売れます。ひと月に計算すると、1000万円も、マスクだけで売れるのです。非常にリピーターの方が多いということで、皆さま方にもこのマスクを使っていただければと思います。よろしくお祈りします。

それで本題のほうですけれども、桐生では次世代モビリティを活用して日本遺産を周遊しようという動きがあります。「ゆっくりズムのまち桐生」という宣言を、昨年11月30日に環境審議会の方々や群馬大学の方々と一緒にさせていただきました。今スピード化が求められている時代ですけれども、あえて桐生は「ゆっくり」の価値観を選択しようという決議でありました。今後どの地域も独自の発想で価値観を選ぶことになってくると思う訳ですけれども、桐生はそれを進めていきたいと思っております。その一つの流れといたしまして、文科省のデザイン・アイというのがありまして、次世代モビリティの導入により持続可能な地方都市のモデル構築をしようということで、全国で大阪市と桐生市の二市が採択されました。これからそういったモビリティを使って、10年後の理想都市を市民の皆さまと築き上げようという運動であります。

具体的に次世代モビリティとはどのようなものなのかというと、桐生の中では三つあります。一つは低速電動コミュニティバス「MAYU(まゆ)」というものです。これは排出ガス0に加えて、走りながらでも、屋根のところが太陽光発電なのでバッテリー充電できます。また、家庭用の100ボルトの電源で充電をすることが可能で、フル充電で約40km走る、最速で19km/hしか走れないコミュニティバス、これが一つです。

もう一つがナローモビリティという、小型電気自動車です。普通よりちょっと規模を小さくした電気自動車です。

三つめがムービングチェアといたしまして、自動運転の電動カートです。桐生は群馬大学といつも連携をとっていますけれども、「町の中に大学があり大学の中に町がある」というキャッチコピーの中で進めています。

実際に走る社会実験も既に行っておりまして、実用化に向けてこれから頑張っていこうとしています。具体的には、東武線の新桐生駅で降りた観光客の方が、ナローモビリティ、電動カートを使って重伝建築まで行きます。そして、無人のムービングチェア、電動カートが引き続き新桐生駅の方まで戻って行きます。こういうイメージをしていただければいいかと思っております。是非この部分を日本遺産としっかり結び付けていければ、さらに良い方向に出来るのではないかと思います。

また、足利の和泉市長さんからお話が合った通り、桐生と足利ではヘリテージ・ツーリズムということで、

サロン・ド・Gや東京の交通会館、ぐんまちゃん家で首長のトップセールスにより業者やマスコミにPRしているケースがあります。私もそれに大賛成で、今度3首長が、トップセールスをする、サロン・ド・Gの新しいバージョンができたらいいなと思っております。

また、さらに桐生のほうでは今年度みどり市と一緒に、桐生・みどり周遊観光推進協議会を立ち上げました。日光に訪れた観光客年間約1200万人の内の1割、120万人がわたらせ渓谷鉄道を使って桐生・みどり市に来てくれば、わたらせ渓谷鉄道が黒字になります。それを目指す取り組みをしています。

それからもう一つ、前橋市さんとも地域のDMOの連携というところで、赤城山を使った連携をしております。例えばサイクリング・ツーリズム、それからグリーン・ツーリズムといったものを、この3市の連携にさらに組み入れていくことによって、より相乗効果が高まっていくのではないかと考えております。以上です。

熊倉氏 3市を核として、もう一つ大きなツーリズムがあるという話だったと思いますが、荒木市長さんをお願いがあるのですけれども、次のステップとして3市の中を電動あるいは自動運転の、県境・市境を越えた公共的な部分で実験できるというですね。どうもいろいろな所でお話を聞いていると、自分の所にコミュニティバスやデマンドバスはあるけれども、隣に行けないといって困っていらっしゃる市民がいらっしゃる、3市で先駆的にツーリズムとして、今回日本遺産と関わりながら新しいIT技術なり電動技術を入れていくと、もっと面白いことになりそうですね。是非お考えください。

最後になりますが、現在コロナがありますけれども、これを越えて3市の市民が交流するのは無論ですけれども、もっと広く全国、あるいは海外からも人をここにお招きするために、次にどんなことをお考えになっていらっしゃるか、館林市から順番に聞いていきたいと思っております。お願いいたします。

須藤館林市長 先ほど群馬サロン・ド・Gで両二市はトップセールスをやっているということでしたけれども、是非これからは館林も加えていただけるよう、よろしくお祈りしたいと思っております。その上で、日本遺産周遊のモデルツアーがどんどん造成されればいいと思っております。3市に共通しているのは東武鉄道さん、観光会社でいうと東武トップツアーズさんなどです。もちろんJRさん関係するかと思うのですが、そういったところとしっかりと連携を図りながら、例えば館林駅の西口は、ロータリーを大きくしましたので、バスが停まれるようになっています。そこで集合して、そこからまず館林市内を周ってから足利に行って、そして桐生を周るというツアーをします。そして例えば、桐生の新桐生駅で解散というようなこともあり得るかなと思っております。こういったことを、民間の観光事業者にどんどんアピールし、そういった方々をモニターとして呼びながら、取り組みを自治体として進めていきたいと思っております。

その他にもよくあるのですけれども、スタンプラリー

です。スタンプラリーをしながら一定のスタンプが押されると何かいただけるよとか、あるいは有名人、歴史・文化・アニメなどありますけれど、聖地巡礼マップなども作りながら取り組んでいくことで、多くの方々が3市を渡ってツアー、旅行することができるのではないかと考えています。

最後に、冒頭に熊倉コーディネーターがおっしゃったことですが、明治の最初、館林は両毛5市をカバーするくらいの規模で、館林県あるいは栃木県になっていました。それが明治9年に分かれたと言いました。なぜ分かれたという部分に意味がありまして、やはりここは明治政府にとって非常に難治の場所でした。今まで、足利尊氏が出た、あるいは徳川の源流になる新田義貞が出た。その後も城主として徳川綱吉を輩出している。そういったことで、ここは日本を治める資質のある、素質のある土壌であると思います。だから明治政府にとっては脅威なので分断をしておこう、分断をしておけば力を削げるだろうと。これが、私たちが群馬県と栃木県に分かれてしまった理由だと思います。ここはまず日本遺産で結束しながら、連携を両毛六市なりで深めていくことができればいいと思っています。そのきっかけとなればさらにいいと思います。ありがとうございます。

熊倉氏 次に和泉市長さん、お願いします。

和泉足利市長 3市のこの後の観光面を含めた連携ということですので、私は一つ大きなポイントになるのではないかと考えているのが、この(写真)古民家です。足利市内にも、繊維業で栄えていた頃にできたお屋敷を含めた、使われていない古民家がたくさんあります。これを若者の手でリノベーションをして、今季節限定ですが、カフェに使ったり、あるいはアートクロスという、アーティストが作品を飾る場として利用しています。実はこの古民家の再生で、僕は館林・桐生のところにも視察におじゃましていますが、一番進んでいるのは桐生だと思っています。非常に素晴らしい古民家が再生されて、フランス料理屋さんになったり、あるいはかつての繊維業のレトロな工場跡地が、いろいろな若者の活動に使われたりしているのです。館林さんも、古民家をカフェに改装するなどという動きが出てきています。私はこの3市を訪れることで、こういう古民家を再生したカフェや、あるいはアートを展示した取り組みが、3市で共通してみられるというようなことになってくると、一つの活かし方として実現可能性が非常に高いのではないかと考えています。

足利市ではこの古民家がそうですけれど、宇都宮大学や文星芸術大学という芸術大学が宇都宮にありまして、その学生さんと提携して、学生さんがこの古民家の隣にある蔵にずっと入り込んで、蔵の中を和紙で包むような改装をやってもらっています。そういった若い力を古民家に入れていく取り組みは一つ大きな可能性があるのではないかとこのように思っております。3市のツーリズムを考える時に一つのキーワードになるのではないかと考えています。

最後に、私は先ほどの動画を見させてもらって、3市の共通項というのはこういうことかなと思いました。

一つは「かかあ天下」に象徴されるように、3市とも働き者の人たちが元々支えてきたのだろうと。その働き者を支えてきた精神構造、気持ちというのが教育であり、論語や儒学が教えた人にやさしく、そして人を批判するのではなくて自分が何をすべきかを第一に考えるという儒学の、非常に純粋な精神構造、これが働くという行為を支えてきたのではないかと、私は強く思っています。そういう意味で、足利に足利学校があって、館林に祈りの沼・実りの沼・守りの沼という大変崇高な神々しい風景の沼、そこに人々が祈る姿があります。そういうものが、館林や足利もかかあ天下という言い方をすることがありますけど、働く女性を筆頭に、非常に勤勉に働く人たちを支える精神構造の土台があったんじゃないかと思っています。そういう意味では、よく働く人と、それを支えた教育と大変純粋な心、これが3市に共通している。ここを一つ、観光やまちづくりの共通コンセプトとして3市で共有していくと、非常に大きな発展性を持っていけないのではないかと考えました。



熊倉氏 荒木市長さん、最後にどうぞ。

荒木桐生市長 今、和泉市長から桐生の古民家の活用ということでお話をいただきましたが、昨年12月29日にNHKの「鶴瓶の家族に乾杯」という番組を見られた方はいらっしゃるでしょうか。そこで、桐生を紹介していただいたのですが、まさに古民家の活用という内容がありました。

一つは、全盛期桐生は芸者さんが控える置屋さんが17ヶ所ありましたが、その一つを、そのままリノベーションしてアルゼンチンのご主人さんと桐生の奥さんに、今は民泊という形で使ってもらっています。それから観音院というところでは、お寺を宿坊という形でのゲストハウスにし、さらには黒保根地区という自然豊かな所では地域おこし協力隊に民泊として使ってもらっています。さらには、桐生には先ほどビデオでも紹介された通りノコギリ屋根工場というのがまだ200以上残っております。これを使って、従来通りの機屋さん、パーマ屋さん、レストラン、ケーキ屋さん、様々な形で活用しております。是非この辺のことに、和泉市長にヒントをいただきましたので、引き続き進めていければいいかなと思います。

それで、私が思う3市の共通というのは、ハードの部分の中で渡良瀬川・東武鉄道・国道50号、それに繊維、この四つです。是非3市でインパクトのあるキャッチコピーを作りたいと思います。これは熊倉先生のほうにお願いしたいと思うのですが、足利市さんとヘリテージツーリズムのインバウンドに向けてのPR動画を2月4日からYouTubeで公開しておりますので、是非見ていただきたいと思うのですが、足利市さんのテーマが、足利学校がありますから当然「学ぶ」です。桐生は「紡ぐ」。それに館林さんの「祈り・実り・守り」、この部分を上手く連携してこの地域を表すいいキャッチコピーができないかと思っています。それを外に大きく発信をしていければいいと思っています。

また、東武鉄道さんとの連携の中では、臨時の列車で「両毛日本遺産トレイン」「シルクトレイン」みたいなものを作っていただけるといいです。また、桐生だと桐生織、足利さんと足利銘仙、館林さんと館林紬というものがありますので、「両毛シルクロードトレイン」「両毛ファブリックトレイン」「両毛テキスタイルトレイン」とか、そんな形で東武鉄道、首都圏の方をこちらの方に呼んでいただいて、一緒に連携がとれればいいかなと思います。それと、「まゆ」が19km/hでしか走れないので、熊倉先生から今ご提案いただきましたけれども、国道50号を走るのはおそらく無理だと思います。ただ、皆さんご存知だと思いますけれども、「路線バスの旅」というものがありますよね。何であの番組の視聴率がいいかと思ったら、乗り継ぎが悪いからです。乗り継ぎが悪いからあれだけ視聴率をとれます。逆をいうと、何で地域間同士の公共交通の連携がとれていなかったのかというのは、改めて反省しなければならない点だということです。それも、この地域でしっかりと連携していければいいと思います。



それと最後、先ほど日本遺産の部分でお話をさせていただいたのですが、グーグルマップで見てきたら、本当にいい共通点があるのです。参考までに、日光市と富岡市を結びます。日光・富岡が世界遺産。そのちょうど真ん中、扇の要に館林市があります。真ん中まっすぐ赤城山のほうに向かって足利市、桐生市で赤城山がある。ここに本庄市があるのですが、この辺に深谷市、渋沢栄一があります。このトライアングルゾー

ンを活かした何かができないかと思っています。3市の集まりなのに、いきなりこのような話をして申し訳ないのですけれど、一つ自分としてもこれから考えていければいいかなと思います。是非頭の中に入れていただければありがたいかなと思います。以上です。

熊倉氏 普通はコーディネーターがまとめるのですけれども、和泉市長さん荒木市長さんがまとめてくださって次々と提案をくださいました。もっといくらかでも話が尽きないような感じですけど、止めなければならぬと思っています。

それで先ほど古民家のリノベーションの話がありました。マペーションも「沼辺」と「イノベーション」なんですよ。そうすると魂のリノベーションマップみたいなものを3市で作ってみるといいのではないのでしょうか。今までバラバラだった3市を繋げたマップを作って、今、荒木市長さんが言われたような絵が出てくるぞということを、3市の市民が確認することから次の一歩が始まりそうだなというふうに思いました。

それで便乗するわけではないのですけれども、渋沢栄一といえば『論語と算盤』ですよ。渋沢栄一『論語と算盤』といっても、多くがその本を読むだけで考えていないんですが、実はそれを実践されていた場所がこの3市だということを、便乗するつもりはありませんけど、改めて市民にお伝えをし、だから3市の資産をもう一度まずお互いが理解し合おう。そしてそれに胸を張って、まさに白鳥が胸を張り羽ばたくように、他所から人を招いていこう。そうすれば、ここに皆さんも留まってくださる、そんな一歩一歩を次々に広げていければいいなと思いました。

でも、今日はとにかく始まりです。3市の始まりです。是非来年、再来年とこういうサミットが引き続いて行われて、どこの席にどこの市民がいるか全くわからないくらいに、混然一体となりながら引き継いでいくことが、とても素晴らしいことに繋がると思います。先ほど須藤市長さんは、日本の要だから明治政府は叩いたのだといいます。叩かれても叩かれきらない令和の要はここから始まる、そのくらいの気概を持って、一歩一歩進んで行きましょう。

その気持ちを込めて3市の市長さんに共同宣言と署名をしていただこうと思います。では、よろしく願いいたします。

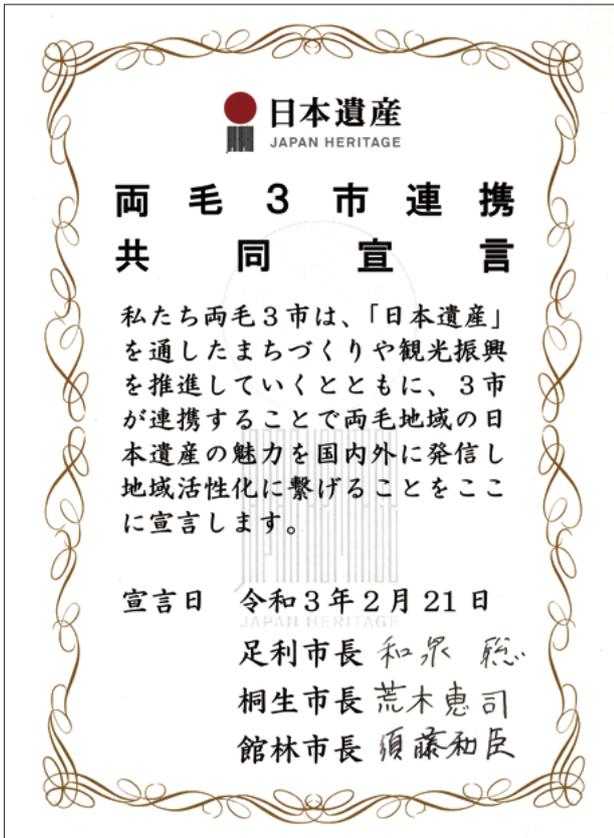
戸叶(司会) パネリストの皆様、コーディネーターの熊倉先生ありがとうございました。それでは今お話しがありました通り、ここから始まるということで、両毛3市の日本遺産の魅力を国内外に発信する共同宣言を行いたいと思います。なお、宣言の内容はお手元のプログラム裏表紙をご覧ください。

それでは、共同宣言書に署名を桐生市長、足利市長、館林市長の順でお願いいたします。

《両毛3市長による署名》

戸叶(司会) ありがとうございました。それではここで3市を代表いたしまして須藤館林市長より宣言を読み上げていただきます。

須藤館林市長 それでは3市を代表いたしまして共同宣言を読ませていただきます。



「両毛3市連携共同宣言。私たち両毛3市は「日本遺産」を通したまちづくりや観光振興を推進していくとともに、3市が連携することで両毛地域の日本遺産の魅力を国内外に発信し地域活性化に繋げることをここに宣言します。宣言日 令和3年2月21日。足利市長和泉聡。桐生市長荒木恵司。館林市長須藤和臣。」

戸叶(司会) ありがとうございます。それではここで写真撮影の時間をとらせていただきたいと思います。



「撮影」

ありがとうございます。お席にお戻りになってください。それでは改めまして熊倉先生本当にありがとうございました。本日は本当に長時間にわたりご参加いただきありがとうございました。以上をもちまして本日の日程を終了いたします。お気をつけてお帰りになってください。

コーディネーター **熊倉 浩靖さん**
HIROYASU KUMAKURA
館林市「日本遺産」推進協議会委員 / 高崎商科大学特任教授

1953年群馬県高崎市生まれ。京大文学部中退。群馬県立女子大学教授を経て高崎商科大学特任教授。現在、群馬県文化審議会副会長、(公財)大川美術館(桐生)・(公財)竹久夢二伊香保記念館(渋川)評議員等。



単著に『上野三碑(こうずけさんび)を読む 増補版』(雄山閣)『「日本」誕生 東国から見る建国のかたち』(現代書館)『井上房一郎一人と功績』(みやま文庫)、編著に『群馬県謎解き散歩』(KADOKAWA新人物文庫)、共著に『共生と民際の歴史学-上田史学を継承する』(雄山閣)など。

パネリスト **両毛3市長紹介**

1958年桐生市生まれ。青山学院大学卒業。社団法人桐生青年会議所副理事長、桐生市PTA連絡協議会副会長などを経て、2003年より桐生市議会議員を3期務め、2011年議長に就任。2015年群馬県議会議員に初当選し、県議会で日本遺産「かかあ天下-ぐんまの絹物語-」関連質疑を意欲的に行う。2019年5月、桐生市長に就任。2020年4月には日本遺産活用室を新設し、市内の日本遺産活用に力を入れている。中学・高校・大学と野球部に所属し、市長就任まで中学生の軟式野球クラブの監督をするほどの野球好き。

桐生市長
荒木 恵司さん
KEIJI ARAKI

1963年足利市生まれ。早稲田大学卒業。朝日新聞に入社し、社会部で事件担当、天声人語補佐などを経て、米ハーバード大学に社費留学。その後、サンパウロ支局長、社会部筆頭次長、宇都宮総局長を歴任し、2013年5月に足利市長に就任。日本遺産「近世日本の教育遺産群-学ぶ心・礼節の本源-」の活動母体となる「教育遺産世界遺産登録推進協議会」の副会長を務め、足利学校をはじめとする教育遺産群の世界遺産登録を目指した活動の中核を担っている。毎朝5kmのランニングが日課。「論語」「孟子」などの中国古典を愛読し、座右の銘は「至誠通天」。

足利市長
和泉 聡さん
SATOSHI IZUMI

1967年館林市生まれ。学習院大学卒業。地元国会議員の公設秘書、農林水産大臣秘書官を経て、2007年群馬県議会議員に初当選し、以後3期務める。この間、群馬県内の「上野三碑」の世界記憶遺産登録推進に尽力する。2017年4月、館林市長に就任。館林市「日本遺産」推進協議会会長。自宅は多々良沼の近くにあり、沼辺の「彫刻の小径」や「夕陽の小径」が散歩コースとなっている。館林市にある沼辺文化にいち早く気づき、日本遺産「里沼」認定を機に、市民協働・共創による新しいまちづくりを推進している。

館林市長
須藤 和臣さん
KAZUOMI SUTO

当日の様子(記録写真)



①会場外観(館林市文化会館カルピス®ホール)



⑤カルピス®ホール内



②受付風景(1)



⑥日本遺産マルシェ(1)



③受付風景(2)



⑦日本遺産マルシェ(2)



④会場ロビー



⑧日本遺産PR展示ブース

令和2年度 館林市日本遺産シンポジウム アンケート結果

❖令和2年度 館林市日本遺産シンポジウムでは、事業内容の効果測定及び将来における日本遺産「里沼」各種事業展開、両毛3市(桐生市・足利市・館林市)連携による事業実施を見据え、アンケート調査を実施した。

❖アンケートは当日資料と共に配付し、シンポジウム終了後に受付にて回収した。

❖当日の参加者400名に対し、回収数は153枚であった。(回答率38.3%)

❖アンケートの質問項目については、右記の質問票(A4サイズ)のとおりである。

❖アンケート結果については、館林市「日本遺産」推進協議会事務局歴史文化部会(館林市教育委員会文化振興課日本遺産プロジェクト)の岡屋紀子・吉村昭和・岩瀬宇で集計・分析を行い、その結果は下記のとおりであった。

2/21 館林市日本遺産シンポジウム アンケート

下記の質問に当てはまるものに○をつけてください。

①このシンポジウムの開催を何で知りましたか？(複数回答可)
 ①自治体の広報誌 ②自治体のホームページ
 ③里沼WEBサイト ④里沼ツイッター
 ⑤チラシ・ポスター ⑥知人・家族
 ⑦教室・研修会・会議等 ⑧その他(新聞等)

②シンポジウムの内容はいかがでしたか？
 (1)第1部=両毛3市の日本遺産認定ストーリー映像
 ①よかった ②どちらともいえない ③よくなかった

(2)第2部=オリジナルバレエ「里沼物語」
 ①よかった ②どちらともいえない ③よくなかった

(3)第3部=パネルディスカッション
 ①よかった ②どちらともいえない ③よくなかった

(4)日本遺産マルシェ(物産販売コーナー)
 ①よかった ②どちらともいえない ③よくなかった

(5)日本遺産PR展示コーナー
 ①よかった ②どちらともいえない ③よくなかった

③館林市にある「里沼」に行ったことはありますか？
 ①はい ②いいえ ③これから行ってみたい

※①③回答したかた 一〇で囲んでください(複数回答可)
 (ア)茂林寺沼・(イ)多々良沼・(ウ)城沼・(エ)近藤沼・(オ)蛇沼

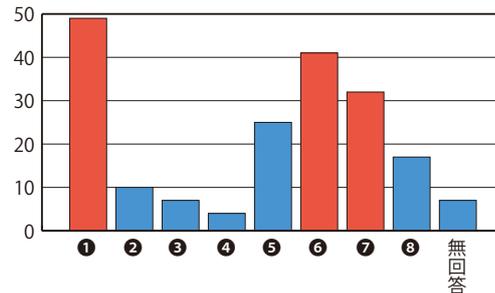
④本日のシンポジウムや両毛3市[桐生市・足利市・館林市]連携についてのご意見・感想があればお書きください。(自由記載)

あなたは
 男・女 []歳 []市・町・村より参加

■アンケート結果：回収153枚/参加400名

①このシンポジウムの開催を何で知りましたか？(複数回答可)

回答(最大153)	数
①自治体の広報誌	49
②自治体のホームページ	10
③里沼WEBサイト	7
④里沼ツイッター	4
⑤チラシ・ポスター	25
⑥知人・家族	41
⑦教室・研修会・会議等	32
⑧その他(新聞等)	17
無回答	7

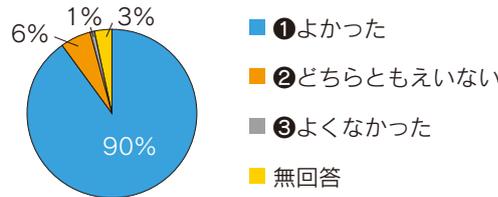


年明けからの新型コロナ感染拡大により、開催2週間前にして有観客開催を正式に決定した。外部広報は積極的には行わなかったが、3市の日本遺産及び文化財、バレエ団体関係者の参加が多くみられ当初想定300名を大幅に上回った。

②シンポジウムの内容はいかがでしたか？

(1)認定ストーリー映像上映

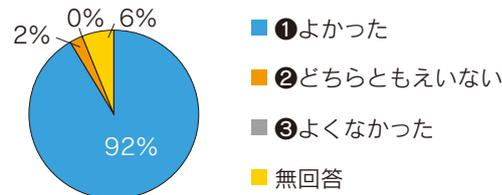
回答(153)	数
①よかった	138
②どちらともいえない	9
③よくなかった	1
無回答	5



各10分程度の映像を上映し3市の認定ストーリーを分かりやすく紹介した。身近なまちの日本遺産を知ることができ参加者からの評価が非常に高かった。

(2)オリジナルバレエ「里沼物語」

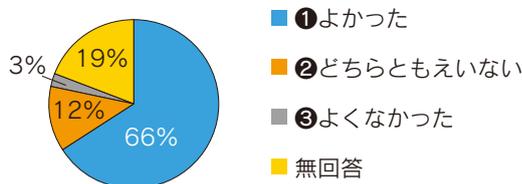
回答(153)	数
①よかった	140
②どちらともいえない	4
③よくなかった	0
無回答	9



日本遺産「里沼」の歴史文化をテーマにしたオリジナルバレエを行い、参加者からは「素晴らしかった」という感想が非常に多く、新しい芸術文化を融合することができた。

(3)パネルディスカッション

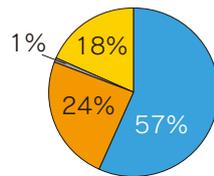
回答(153)	数
①よかった	101
②どちらともいえない	19
③よくなかった	4
無回答	29



桐生市・足利市・館林市長により有意義な議論・意見交換が行われ、今後の3市連携事業の展開に向けてのキックオフの場とすることができた。

(4) 日本遺産マルシェ

回答(153)	数
①よかった	87
②どちらともえない	37
③よくなかった	1
無回答	28

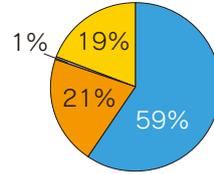


- ①よかった
- ②どちらともえない
- ③よくなかった
- 無回答

新型コロナ感染拡大防止に配慮し出店数を最小限に留めたが、各市ブースともに賑わいを見せており、地場産業と日本遺産関連商品PRの場となった。

(5) 日本遺産PRブース展示

回答(153)	数
①よかった	91
②どちらともえない	32
③よくなかった	1
無回答	29

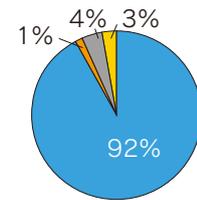


- ①よかった
- ②どちらともえない
- ③よくなかった
- 無回答

各市とも趣向を凝らした日本遺産PR展示を行い、第1部の映像上映と合わせてストーリー普及・情報発信につなげることができた。

③ 館林市にある「里沼」に行ったことはありますか？(複数回答可)

回答(153)	数
①はい	141
②いいえ	2
③これから行ってみたい	6
無回答	4

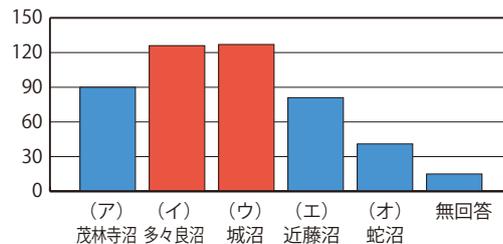


- ①はい
- ②いいえ
- ③これから行ってみたい
- 無回答

「①はい」と回答したかたが圧倒的に多く、館林市「里沼」の観光資源としてのポテンシャルの高さがうかがえる結果となった。

①②と回答したかたが行った・行ってみたい沼

回答(最大153)	数
(ア) 茂林寺沼	90
(イ) 多々良沼	126
(ウ) 城沼	127
(エ) 近藤沼	81
(オ) 蛇沼	41
無回答	15



本シンポジウムでは約4割が市外からの参加にも関わらず、多々良沼・城沼への来訪が多く、他の沼も含めると本市の「里沼」に魅力を感じるかたがとても多いことが分かる。

④ 本日のシンポジウムや両毛3市連携についてのご意見・感想があればお書きください。(自由記述)

- 沼辺の景観を大切にしたいと思うので、周辺の除草に取り組んでください。(男・63歳・千代田町)
- 館林市の里沼ですが、水が基本となっていると思います。その水のつながりで邑楽町・板倉町・明和町などと一緒に日本遺産として認定して欲しかったと思います。(男・66歳・館林市)
- ずっと館林市に住んでいますが、歴史や沼など知らないことも多く、この機会に歩いてみようと思えました。大人になると興味が湧きます。(女・37歳・館林市)
- 私が若い頃、多々良沼はムジナモで有名な沼でした。現在はもう見当たりませんか？生息していると素晴らしいと思いますが、いかがでしょうか？(男・80歳・足利市)
- 織物が共通することがすてきだと思いました。両毛3市の良さが伝わり、ますます両毛が好きになりました。(女・45歳・邑楽町)
- 足利市民ですが、両毛3市が日本遺産認定地だとは知りませんでした。一般の人々にもっとPRして、いただきたいと思いました。第3部はディスカッションではなく報告のように感じましたが、先々のビジョンが見えて良かったと感じました。館林市長さんのお話がとても分かりやすく、最高でした。(女・70歳・足利市)
- 足利を50年離れていて、両毛3市を改めて知ることができて大変感動しました。バレイも素晴らしかったです。ありがとうございました。(女・72歳・足利市)
- できるだけ大きな範囲で連携して、日本遺産のPRを行ってください。(男・72歳・館林市)
- 周辺の自治体が日本遺産を通じて連携をすることは大変意義深いものがある。各々の日本遺産について理解を深める良い機会となった。(男・73歳・館林市)
- 本当に素晴らしい催しだったと思います。願わくは、この輪をどう広げるといふ点に力を尽くして欲しい。(男・79歳・板倉町)
- 地域を越えた交流が出来れば良いのではないかと感じました。

- (男・29歳・足利市)
- これまでもヘリテージツーリズムで桐生市・足利市で連携していましたが、館林市の資産が日本遺産に認定されたことで、両毛地区の厚みが増し、今後の連携によりそれが更に深まることになるため、良い取り組みだと思います。(男・60歳・足利市)
- 織物・国道50号・東武鉄道をキーワードとして、古民家の活用や、3市による巡回ルートを造ると良い。(男・73歳・足利市)
- 各々その市に住んでいる人の心が豊かになる取り組みをお願いします。(男・55歳・館林市)
- これからの両毛3市の活動を、期待して見守らせていただきます。(女・77歳・邑楽町)
- 渡良瀬川のサイクリングロードを両毛3市周遊で活かすと良い。(男・49歳・館林市)
- 両毛3市で協力しあって欲しい。(男・40歳・館林市)
- 物産展で3市の名産品をお互いに販売していただければ、近隣の市の魅力が伝わるのでは。館林市内はJA農産物直売所「ぼんぼこ」が行きやすいです。沼の魅力、自然+αの「α」が見つければ、もっと魅力的になりそうです。(女・50歳・館林市)
- シンポジウムの中でも話題に出ましたが、今回が両毛3市連携の始まり。両毛3市のつながりを今後発展させたい。(男・76歳・足利市)
- 貴重な遺産を、これからも研究・保存・活用につなげて欲しい。両毛地域のつながりを深めて欲しい。(男・61歳・足利市)
- 近隣の市がそれぞれの長所を共同で紹介する素晴らしい取り組みだったと思う。それぞれテーマの違う日本遺産であり、両毛3市で拡大できるものはぜひ取組んで欲しいと思います。パネルディスカッションで話があったように、3市の連携が進むことを願っております。(男・54歳・足利市)
- 自然を守って、歴史をたたえて、未来に向かって連携して行きたいです。(女・63歳・足利市)
- 3市長さんの地域愛を感じ、頼もしかった。これから両毛地域が連携して、発展して行くことを願います。(女・64歳・館林市)

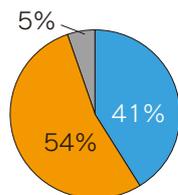
- 両毛3市の市長さんは、みなさん素晴らしいアイデアをお持ちで、郷土愛をひしひしと感じました。脚下照顧で私も郷土を見直したいと思います。(男・61歳・館林市)
- 今後に期待します!(男・63歳・足利市)
- 今日が3市の始まり。頑張りましょう。楽しそうじゃん!(女・一・足利市)
- 3市の連携楽しみにしています!(女・29歳・館林市)
- 両毛3市がガッチリ手を組んで今後ますます発展して行くように応援します。頑張ってください。(男・72歳・館林市)
- 3市合同の日本遺産のバスツアーを造成して、マスコミを利用して全国にアピールして欲しい。(男・79歳・館林市)
- 両毛3市には渡良瀬川が流れています。川を共通する観光ができたらと思います。(男・66歳・館林市)
- これからも3市で連携していくと良いと思います。(男・51歳・館林市)
- 今後も3市の連携が深まるシンポジウムやイベントを期待します。(男・64歳・館林市)
- 素晴らしい企画でした。バレエに感動いたしました。(女・79歳・館林市)
- オリジナルバレエ「里沼物語」は大変すばらしかった。日本遺産が両毛エリアに3つあることに大きな可能性を感じた。(男・54歳・高崎市)
- テーマ連携である日本遺産を、地域連携という新しい切り口でつなぐ試みは、両毛3市ならではのもので。シンポジウムではワクワクするアイデアが出され素晴らしい内容でした。期待したいです。(男・68歳・桐生市)
- PRが大切と考えます。若者のSNSの力を使い、情報発信を頑張ってください。次回開催する場合は、アトラクションは最後にしたら良いと思います。(女・38歳・足利市)
- 今回のシンポジウムで桐生市や足利市の魅力が伝わってきた。このシンポジウムで学んだ内容を実際に現地に足を運んで、見てみたいと思います。(男・69歳・館林市)
- 隣町の邑楽町にずっと住んでいて、両毛3市は子どもの頃から遠足などで行っていました。大人になり、子どもの頃とは違った観点で見て、感じて、このステキな日本遺産を大事にしていきたいと改めて思いました。(女・45歳・邑楽町)
- パネルディスカッションに興味深く聴かせていただきました。今後3市が協力し、様々な企画が行われることを期待しています。(一・一・館林市)
- バレエが良かった。若い人たちにも里沼にほんの少しでも関心を持っていただけたかと思う。(女・76歳・館林市)
- とても素晴らしかったです。(女・70歳・明和町)

- 3市について関心が深まり、勉強するきっかけにしたいと思います。(女・73歳・館林市)
- 内容が濃かった。今後が楽しみ。バレエが素晴らしかった。(女・80歳・館林市)
- 身近にこのような素晴らしい文化があることを知らなかったです。もっと多くの人に知ってもらいたいと思います。(女・77歳・館林市)
- 3市の市長さんのお話が良かったです。バレエがすごかったです。(男・71歳・足利市)
- 3市が連携していく話題がもう少し聴きたかった。(男・58歳・館林市)
- 今回のようなシンポジウムを継続して開催して欲しい。(女・68歳・館林市)
- 認定ストーリー映像が全体的に暗かった。もっと明るくしたほうが見やすい。第2部のオリジナルバレエは素晴らしかったです。(男・80歳・館林市)
- 私も関係する観光客なので、仲良くやって欲しい。バレエを初めて見たが、大変良かった。今日はありがとうございました。(一・49歳・佐野市)
- バレエが美しかったです。(女・44歳・館林市)
- バレエが終わったら退席する人が多かったのも、最後にバレエを演出したほうがよかったと思う。ほぼバレエ目的で見に来ている人が多い印象です。バレエはとても良かったです。見入ってしまいました。(女・59歳・館林市)
- これからもこのような機会をつくって是非開催してください。(女・84歳・館林市)
- 楽しかったです。(女・31歳・館林市)
- 機会があれば、桐生市・足利市に出かけたいです。(女・75歳・館林市)
- 館林市の文化は古い文化と新しい文化の両方が大切です。今回、バレエ公演を企画してくれて大変うれしく思います。(男・50歳・館林市)
- 第2部のオリジナルバレエ「里沼物語」がとてもよかったです。(女・71歳・館林市)
- 桐生市・足利市・館林市には何かあると楽しいので出かけて行きます。自分の足で行けるのでありがたいです。(女・83歳・板倉町)
- 3市合同の人気グルメを食べるコーナーだったり、テイクアウトできる店があると、もっと興味を持ってもらえると思います。(女・42歳・館林市)
- 3市の歴史が学びました。(女・一・足利市)

○その他 (参加者属性についての質問項目)

あなたは

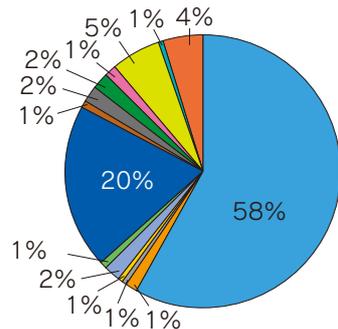
回答(153)	数
男	63
女	82
無回答	8



■ 男
■ 女
■ 無回答

お住まい

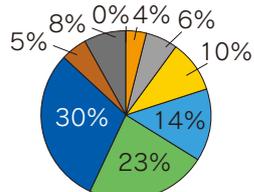
回答(153)	数
館林市内	89
桐生市	2
高崎市	1
伊勢崎市	1
太田市	3
みどり市	1
足利市	30
佐野市	1
板倉町	3
明和町	3
千代田町	2
邑楽町	9
さいたま市	1
無回答	7



■ 館林市 ■ 桐生市 ■ 高崎市
■ 伊勢崎市 ■ 太田市 ■ みどり市
■ 足利市 ■ 佐野市 ■ 板倉町
■ 明和町 ■ 千代田町 ■ 邑楽町
■ さいたま市 ■ 無回答

年齢

回答(153)	数
10代	0
20代	6
30代	9
40代	15
50代	21
60代	35
70代	47
80代	8
無回答	12



■ 10代未満 ■ 50代
■ 20代 ■ 60代
■ 30代 ■ 70代
■ 40代 ■ 80代以上
■ 無回答

本シンポジウムは両毛3市連携をテーマに開催したことから、館林市外からの参加者が約4割を占めた。特筆すべきは足利市からの参加者が2割に達しており、関心の高さがうかがえる。また“新たな顧客創造”の観点からバレエ団体・関係者を取り込んだことで、一般的な文化財・歴史系事業と比較して30~50代の参加も多く、参加者の約6割が女性であったことは、今後の日本遺産「里沼」の事業展開への重要なステップとなった。

館 林
の
里 沼



令和2年度 館林市日本遺産シンポジウム
「つなごう日本遺産 ～両毛3市の魅力発信～」 報告書

令和3年(2021)3月12日



編集：館林市「日本遺産」推進協議会事務局歴史文化部会
(館林市教育委員会文化振興課日本遺産プロジェクト)
発行：館林市「日本遺産」推進協議会



SATO-NUMA.JP

☎ 374-0018 群馬県館林市城町3番1号 ☎ 0276-71-4111
✉ nihonisan@city.tatebayashi.gunma.jp

※本報告書記載内容の無断転載等は禁じます



文化庁 文化芸術振興費補助金(地域文化財総合活用推進事業)